

発掘調査報告第15集

駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営は場整備事業（昭和57年度分）

埋蔵文化財緊急発掘調査

栗林神社東遺跡

緊急発掘調査報告書

1983

南信土地改良事務所

駒ヶ根市教育委員会

序

文

今回ここに刊行の運びとなりました報告書は、竜東地区的県営は場整備事業に伴い、昭和57年度に実施された栗林神社東遺跡の緊急発掘調査の報告であります。

栗林神社東遺跡は、大正末年に鳥居龍藏博士によって踏査された「先史及原史時代の上伊那」にすでに記載され、古くから弥生時代の集落跡として注目されてまいりました。以後、道路工事や耕作、削土等により数多くの遺物が発見されました。組織的な調査は行なわれずに今日に至っておりました。

幸いにも今年度において、文化庁及び長野県教育委員会の御指導と御高配を得て、駒ヶ根市文化財審議会会长友野良一氏を団長とする栗林神社東遺跡発掘調査団を編成し、本格的な発掘調査を実施することができました。当調査の結果、弥生時代の住居跡や遺物、平安時代の住居跡や遺物が数多く発見され、弥生時代の集落を研究する上で貴重な資料がまた一つ加えられました。本報告書の各項にみられます多くの遺構や遺物が、今後の研究に果たす役割は大きいものがあると確信しております。

長期間にわたって発掘調査をご指導下さった友野良一団長を始め、快く発掘作業に参加していただいた地元の方々、事業に深いご理解をいただいた東部土地改良区並びに南信土地改良事務所の方々、地主の方々等、多くの皆さまのご協力、ご厚意によりまして所期の目的を達成することができました。

ここに関係者の皆さま方に心から感謝申し上げますとともに、この報告書が学界のお役に立つことを念願する次第であります。

昭和58年3月

駒ヶ根市教育長 木下 衛

凡　　例

1. 今回の調査は、昭和57年度に実施された駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業に先立つもので、昭和57年6月5日から8月12日にかけて調査したものである。
2. 発掘調査は、南信土地改良事務所の委託により、国県補助を得て、駒ヶ根市教育委員会が中心となり、県営ほ場整備事業駒ヶ根東部地区埋蔵文化財調査会を編成して行なった。
3. 本報告書は、調査によって明らかとなった遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、文章記述はできる限り簡略化した。
4. 遺物整理作業の中で、土器洗いを渋谷鉄雄、佐藤秋子、中村文夫、小林正信、小林満寿子、渋谷吉子、細田律恵、宮下三郎が担当し、土器の復元を小松原義人が担当した。土器の実測、拓影、写真撮影、図面整理は、小原晃一が担当した。
5. 本報告書の執筆は、小原が行なった。
6. 本遺跡の出土品、諸記録は、市立駒ヶ根博物館が保管している。
7. 採図中のNO.は通し番号であり、本文中の番号と一致する。
8. 遺構・遺物関係の図面の縮尺はその都度指示してある。
9. 遺物の表示については、下記のとおりである。

● 土器 ▲ 石器 ○ 焼土 △ 粘土

目　　次

序　　文

第Ⅰ章 発掘調査の経緯.....	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過.....	1
第2節 調査会の組織.....	1
第3節 発掘作業経過.....	2 ~ 5
第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境.....	6
第Ⅲ章 発掘調査.....	9
第1節 調査概要.....	9
第2節 調査A 地区遺構と遺物.....	10
第3節 調査B 地区遺構と遺物.....	13
第4節 調査C 地区遺構と遺物.....	14
第Ⅳ章 まとめ.....	30

写　　真

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

駒ヶ根市東伊那栗林に位置する栗林神社東遺跡が駒ヶ根市東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業の一部に入るとのことで、昭和56年9月1日に、長野県教育委員会関主事、南信土地改良事務所桃沢、丸山主任、駒ヶ根市農林課倉田、北沢、市教育委員会北沢、増沢、小原出席のもとで、事前現地協議をした結果、記録保存を行うということで駒ヶ根市が担当して発掘調査を行うこととなった。調査面積600m²、調査費用420万で調査を行うという協議であった。

以後、東部土地改良区と協議を重ねる中で、一部事業範囲が減少したことと盛土工法で現状保存される箇所が生じてきた為、調査面積を400m²、調査費用を240万で実施する内容に変更された。調査費用の内訳は、南信土地改良事務所分174万、国県補助分66万であった。

事務手続きは、昭和57年4月23日付国庫補助金交付申請、6月12日付県費補助金交付申請を行う中で、5月31日に、南信土地改良事務所長と市長との間に「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を取り交わし、つづいて、市長と埋蔵文化財調査会会长との間に再委託契約を締結した。

なお、昭和58年9月24日付で、文化庁長官、県教育委員会へ「文化財保護事業計画変更承認申請書」を提出した。

調査は、県営ほ場整備事業駒ヶ根東部地区埋蔵文化財調査会が行うこととし、調査団を編成し、団長には友野良一氏をお願いし、昭和57年6月5日から調査に入った。

第2節 調査会の組織

● 県営ほ場整備事業駒ヶ根東部地区埋蔵文化財調査会

会長 木下 衛（駒ヶ根市教育長）

理事 小池 金義（〃 教育次長）

〃 宮脇 昌三（〃 文化財審議委員）

〃 松村 義也（〃 〃 ）

〃 竹村 進（〃 〃 ）

〃 増沢 広人（市立駒ヶ根博物館長）

監事 中原 正純（市文化財保存会会长）

〃 北原 名田造（駒ヶ根郷土研究会会长）

幹事 北沢 吉三（市教育委員会社会教育係長）

〃 小林 晃一（〃 社会教育主査）

〃 野々村 はるゑ（市立駒ヶ根博物館）

幹事 北原和男（市立駒ヶ根博物館）

〃 小原晃一（ 〃 ）

● 調査団

団長 友野良一（日本考古学協会会員）

〈発掘担当者〉

調査員 小原晃一（長野県考古学会会員）

（ 〃 ）

〃 小町谷元

指導者 関孝一（長野県教育委員会指導主事）

白田武正（ 〃 ）

郷道哲章（ 〃 ）

樋口昇一（ 〃 専門主事）

林茂樹（日本考古学協会会員） （順不同、敬称略）

第3節 発掘作業経過

● 発掘作業日誌

6月5日（土） 現場にて発掘作業の打合せを行う。友野団長より当遺跡の概略説明を受ける。調査区域の中へ、南北軸に沿って、北よりあ・か・さ～、東西軸に沿って1・6・11～の10m×10mの主グイを設定する。調査区を、西よりA・B・C区と分けた。作業は、現場草刈りと、テントの設営を行い、午後にあ～こ～4Gの表土、を一4Gの表土を掘り下げた。写真撮影。

6月6日（日） 現場作業休み。

6月7日（月） 調査A地区あ～か～2・3G、あ～か～5・6G表土掘り下げ。あ～2Gより吊鐘？の型らしきしっかりした遺物が出土。あ～1～8にかけては擾乱している。

6月8日（火） 前日のしっかりした遺物を友野団長に鑑定していただいたが、カットをしてみると鉢状を呈していて、堆肥等を貯蔵しておく施設であると判明し、「農業用貯蔵施設」と名付ける。う～く～1G、か～さ～5・6G掘り下げ。耕作時のうねと、みそ土部分を検出。

6月9日（水） A地区ベルト清掃、実測、写真撮影。土手草刈り。地形測量A・B地区を%で行う。農業用貯蔵施設掘り下げ。な～1～6G掘り下げ。A地区南側を試掘する。大型壺形土器が、て～8G周辺より出土。シートをかぶし再調査の為、埋める。

6月10日（木） A地区あ～さ～1～7G清掃、写真撮影。A地区た～は一～8Gをブルドーザーにより表土を剥ぐ。周辺草刈り。た～は一～11G主グイ打ち。5m×5mのグリットを設定し、浮き土を仮清掃。

6月12日（金） A地区南側A・Bグリット（5m×5m）掘り下げ。Bグリット南東、暗褐色土層より鉄津出土。

6月12日（土） A・B・D・E・Fグリット掘り下げ。大型壺形土器清掃。写真撮影。農業用貯蔵施設清掃。%でセクション実測。写真撮影。

6月13日（日） 現場作業休み。

- 6月14日（月） 雨天の為、現場作業中止。
- 6月15日（火） 調査A地区南側、D・E・Fグリット掘り下げ。Fグリット出土遺物平板測量。レベル実測。写真撮影。
- 6月16日（水） A地区南側、D・E・Fグリット掘り下げ。清掃。D～Fグリットベルト清掃。写真撮影。C・H～Jグリット掘り下げ。Iグリットより天目破片出土。
- 6月17日（木） H～Jグリット掘り下げ。K・C・Gグリット掘り下げ。完了。清掃。D～FのS～Nセクション実測。写真撮影。Jベルトはずし。Jグリットより住居跡検出。北西壁にカマドあり。
- 6月18日（金） 雨天の為、現場作業中止。
- 6月19日（土） J・Kグリット掘り下げ。A・D・Hグリット西面、B・F・Jグリット東面、Hグリット南・北面、Gグリット南面の各セクション実測。写真撮影。B～F・Hグリットのベルトはずし。B・Mを645.50mに設定する。
- 6月20日（日） 現場作業休み。
- 6月21日（月） A地区南側、A～Kグリット清掃。1号住ベルト設定。1号住掘り下げ。南東床面やや上より寛永通宝出土。Bグリットよりピット検出。Eグリットより鉄錐出土。
- 6月22日（火） 1号住居跡出土遺物平板測量。レベル実測を行い取り上げる。ベルト清掃。写真撮影。A・B・D～F・H・Iグリット清掃。ピット掘り下げ。
- 6月23日（水） A・B・D～Fグリット掘り下げ。ベルト設定（暗褐色土層中に）。ベルト清掃。1号住ベルト実測。写真撮影。C地区へ10m×10mの主グイを打つ。
- 6月24日（木） A地区、1号住出土遺物写真撮影。同遺物平板測量を行い、レベル実測を取り上げる。A・B・D～Fのベルト実測。ピット群掘り下げ。C地区C～Fグリット掘り下げ。終了。G・Iグリットは中途。表土が25cm前後と浅く、出土遺物は、弥生時代後期の土器や石包丁（打製）が出土。
- 6月25日（金） C地区C～Jグリット出土遺物写真撮影及び平板測量、レベル実測。H・J・K・Lグリット掘り下げ。Gグリットより鉄製品、Hグリットよりすり鉢、鉄製品出土。
- 6月26日（土） A・C～Hグリット掘り下げ。出土遺物写真撮影及び平板測量、取り上げ。D～Jグリットベルト清掃、写真撮影、セクション実測。C～Eグリット間に落ち込みあり。
- 6月27日（日） 現場作業休み。
- 6月28日（月） A・B・I・Jグリット掘り下げ。C～Fグリット出土遺物写真撮影及び平板測量・レベル実測・取り上げ。S・T・Zグリット掘り下げ。F～Hグリット間に落ち込みあり。
- 6月29日（火） O・T・X～Zグリット掘り下げ。E～Iグリット出土遺物写真撮影及び平板測量・レベル実測・取り上げ。C～D、E～Fベルトセクション写真撮影・実測。
- 6月30日（水） 雨天の為、現場作業休み。
- 7月1日（木） C地区M・N・V・Wグリット掘り下げ。C・D・I・Jグリットセクショ

ン写真撮影・実測。

7月2日（金） C地区G・V・Wグリット掘り下げ。A～C・E～1ベルトセクション、N～P、R～Tベルトセクション、O・S・Qベルトセクション、M～N、O～P、Q～Yベルトセクション各々写真撮影・実測。

7月3日（土） O～P～Xベルトはすし。X～Zベルト実測、はずし作業。Q～S、X～Zグリット出土遺物写真撮影、平板測量、レベル実測、取り上げ作業。Z'～Vグリット清掃。A地区1号住清掃。写真撮影。B地区グリット9ヶ所掘り下げ。12～えGより石錐、14～くGより繩文中期土器片出土するが、開田時の排土により、ローム面まで削土され、硬層が表土下30cmで表れ、遺構は残っていないと判断する。

7月4日（日） 「一日考古学教室」を開催する。友野団長、小原が説明にあたる。大型壺形土器を $\frac{1}{2}$ で平板測量し、 $\frac{1}{2}$ カットをしながら取り上げる。参加者50名と盛況であった。

7月5日（月） A地区ピット掘り下げ作業。B地区グリット掘り下げ作業を行う。

7月6日（火） A地区1号住平板測量を $\frac{1}{2}$ で行う。B地区地形測量 $\frac{1}{2}$ で行う。C地区水まきを行い、シートをかぶせ、次日にそなえる。作業員は晴天つづきで作業休み。

7月7日（水） 雨天の為、現場作業中止。

7月8日（木） A地区1号住カマド及び東壁焼土集中箇所をカットして掘り下げる。写真撮影と実測を行う。ピット群掘り下げ作業を行い、仮清掃後、写真撮影。C地区第1号住掘り下げ周辺清掃。

7月9日（金） 雨天の為、現場作業中止。

7月10日（土） A地区1号カマド掘り下げ終了。写真撮影と実測を行う。C地区1号住出土遺物写真撮影・平板測量・レベル実測・取り上げ。A・B地区調査終了。

7月11日（日） 現場作業休み。

7月12日（月） 雨天の為、現場作業中止。

7月13日（火） C地区1～4号住掘り下げ。出土遺物写真撮影・平板測量・レベル実測・取り上げ作業を行う。全体を仮清掃する。3号住中心部に粘土塊が検出される。4号住は、第1号土塙により切られている。

7月14日（水） C地区1～6号住掘り下げ。土塙1号 $\frac{1}{2}$ カットとして掘り下げ。2～4・6号住ベルト清掃。3・4号住出土遺物写真撮影・平板測量・レベル実測・取り上げを行う。溝状遺構1・2号掘り下げ。

7月15日（木） 5～8号住掘り下げ。6・7号住出土遺物写真撮影・平板測量・レベル実測取り上げ作業を行う。

7月16日（金） 5・6号住掘り下げ。溝状遺構1・2号清掃、写真撮影。2号住出土遺物写真撮影・平板測量・レベル実測・取り上げ。3・4・6号住ベルト写真撮影・実測、はずし作業。

7月17日（土） 雨天の為、現場作業中止。

7月18日（日） 1・2・4号住掘り下げ。4号住西壁寄り覆土より炭化クルミ出土。1・5

号住出土遺物写真撮影・平板測量・レベル実測・取り上げ作業。1号住東壁にピットあり、又、覆土中に焼土多く遺存する。4号住は意識的に埋められたと思われるロームが二次堆積している。

7月19日(月) 雨天の為、現場作業中止。

7月20日(火) 4・5号住掘り下げ作業。4・5号住遺物写真撮影・平板測量・レベル出土実測・取り上げ作業を行う。

7月21日(水) 4号住掘り下げ。出土遺物平板測量・取り上げ。1・2・5号住ベルト写真撮影・実測後、ベルトはずし作業。

7月22日(木) 1号住拡張掘り下げ。2・5・6号住出土遺物平板測量後、取り上げ。6号住平板測量。V・Z'グリット掘り下げ後、出土遺物平板測量。

7月23日(金) 7・8号住掘り下げ。出土遺物写真撮影後、平板測量・取り上げ。V・Z'グリット掘り下げ。9~11号住とする。

7月24日(土) 1・2号住掘り下げ。出土遺物平板測量・レベル実測・取り上げ。溝状造構1号断面実測・写真撮影。

7月25日(日)~28日(水) 雨天の為、現場作業中止。PM3:00からA地区遺構全面測量。

7月29日(木) 1・2号住掘り下げ。出土遺物写真撮影・平板測量。土塙1・2号拡張。溝状造構2号ベルトはずし拡張。写真撮影。7号住掘り下げ。

7月30日(金) 6・7・9号住掘り下げ。6号住出土遺物平板測量。溝状造構1・2号、土塙2号出土遺物平板測量・レベル実測・取り上げ

7月31日(土) 9~11号住掘り下げ。ベルト清掃、写真撮影。7号住、溝状造構1・2号、土塙1号平板測量。写真撮影。4号住二次堆積ローム掘り下げ。

8月1日(日) 現場作業休み。

8月2日(月)・3日(火) 雨天の為、現場作業中止。

8月4日(水) C地区遺構全面測量。9~11号住掘り下げ。出土遺物平板測量・レベル実測・取り上げ。1~3・5・8号住平板測量・レベル実測。

8月5日(木) 8号住掘り下げ。出土遺物平板測量・取り上げ。1~3・8号住埋廐炉写真撮影。セクション実測・写真撮影・取り上げ・清掃。

8月6日(金) 4号住出土遺物写真撮影・平板測量・レベル実測。2・7号住平板測量・レベル実測。

8月7日(土) 3~5号住平板測量・レベル実測。5・10号住地床炉及び埋廐炉写真撮影、セクション実測・取り上げ。全遺構・全景写真撮影。テント・器材整理。A地区「農業用貯蔵施設」取り上げ。本日をもって、発掘作業を終了する。

8月9日(日)・10日(月) 栗林神社東遺跡出土遺物を中心とした「弥生文化展」を開催。

8月11日(火) 9~11号住平板測量・レベル実測。

8月12日(水) 現場片付け。発掘器材を撤収する。

〔発掘参加者名簿〕

白川仁重、羽生正吉、宮下三郎、小林正信、小林満寿子、渋谷鉄雄、渋谷吉子、中村文夫

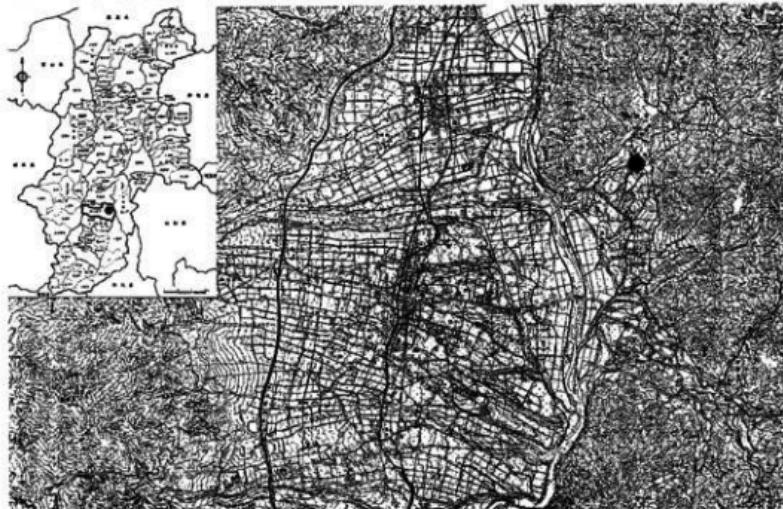
下島清一、林志づ子、細田律恵、佐藤秋子

〔協力者〕 細田文彦

6週間余にわたって、真夏の炎天下の中で、発掘調査に参加し協力していただいた方々に、心から感謝の意を申し上げる次第です。本当にありがとうございました。 (小原亮一)

第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

当遺跡は、駒ヶ根市東伊那3251～5628番地に所在する。国鉄飯田線太田切駅より北東へ約4kmに位置し、標高は650m前後である。高島谷山より流れ出る塩田川の左岸段上に南北約100m、東西約150mの広範囲を占め、同地区狐久保遺跡と並んで市内で有数の弥生時代の集落遺跡である。



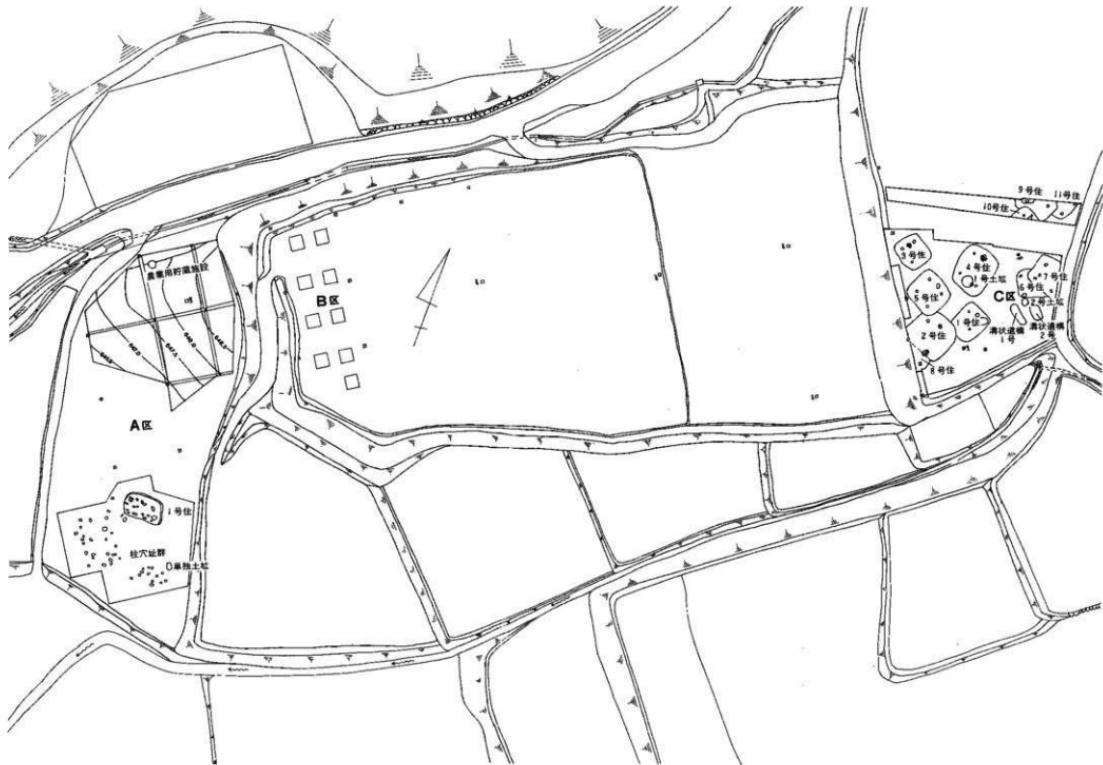
第1図 栗林神社東遺跡位置図 ($S = 1/100,000$)

当遺跡の層位は、以下に示すとおりである。

第Ⅰ層—表土	耕作土
第Ⅱ層—暗褐色土	
第Ⅲ層—茶褐色土	(木炭含む)
第Ⅳ層—明褐色土	
第Ⅴ層—茶褐色土 (")	(")
第Ⅵ層—暗茶褐色土 (")	
第Ⅶ層—黒褐色土 (")	(")
第Ⅷ層—ローム層	
第Ⅸ層—ローム腐乱土	(")
第Ⅹ層—焼土	



第2図 栗林神社東遺跡調査区域 ($S = 1/3,000$)



第3図 栗林神社東遺跡調査A・B・C地区及び構造分布図 (S=1/600)

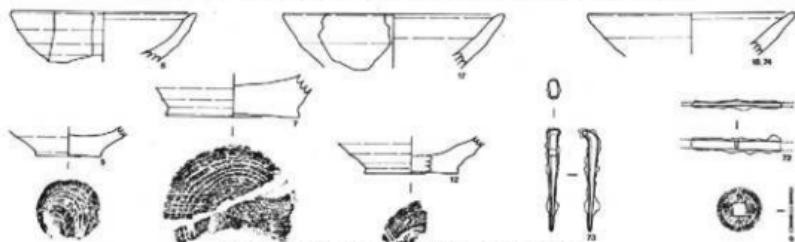
第三章 発掘調査

第1節 調査概要

調査方法は、第3図のよう、A・B・Cの3つの調査区に分け、A区北西隅を基準に東西軸に1・6・11の数字で、南北軸にあ・か・さ～のひらがなで10m直交の主グリッドを設定し、A地区は 5×5 mの中グリッド、B地区は 2×2 mの小グリッド、C地区は 5×5 mの中グリッドを設けた。出土遺物は、I・II層はグリッドごとに、III層以下は全点ドットし、レベルを測った。総数で3038点に及んだ。発見された遺構は弥生時代後期の住居跡10軒、単独土塹2基、平安時代以降の住居跡2軒、時代不明の土塹1基、溝状遺構2ヶ所、柱穴跡群1ヶ所である。



第4図 A地区第1号住居跡実測図及び出土遺物分布図 (S=1/60)



第5図 A地区第1号住居跡出土遺物実測図

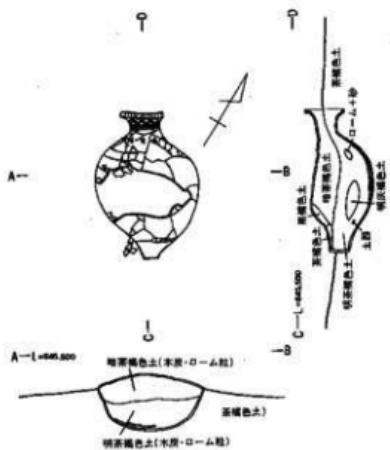
第2節 調査A地区遺構と遺物

第1号住居跡（第4・5図 写真5~11）

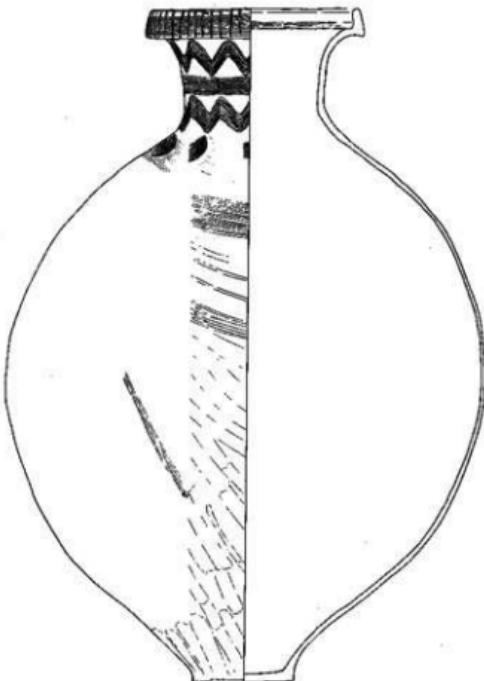
本跡はA地区的南端に位置し、東西5.7m、南北4mの隅丸長方形を呈する。壁高は北で15cm東で10cmと浅く、西はなだらかな傾斜である。北・東壁に沿って3cm前後の周溝がある。カマドは北西壁に設けられている。南東壁に焼土集中ヶ所が遺存。P₁・3・4が主柱穴と考えられ、P₆辺りに4本目が存在しそうであるが不明であった。出土遺物は少なく、第5図の土師器環と釘・棒状鉄製品、寛永通宝が目立つ。

単独土塗（第6～8図 写真16～22）

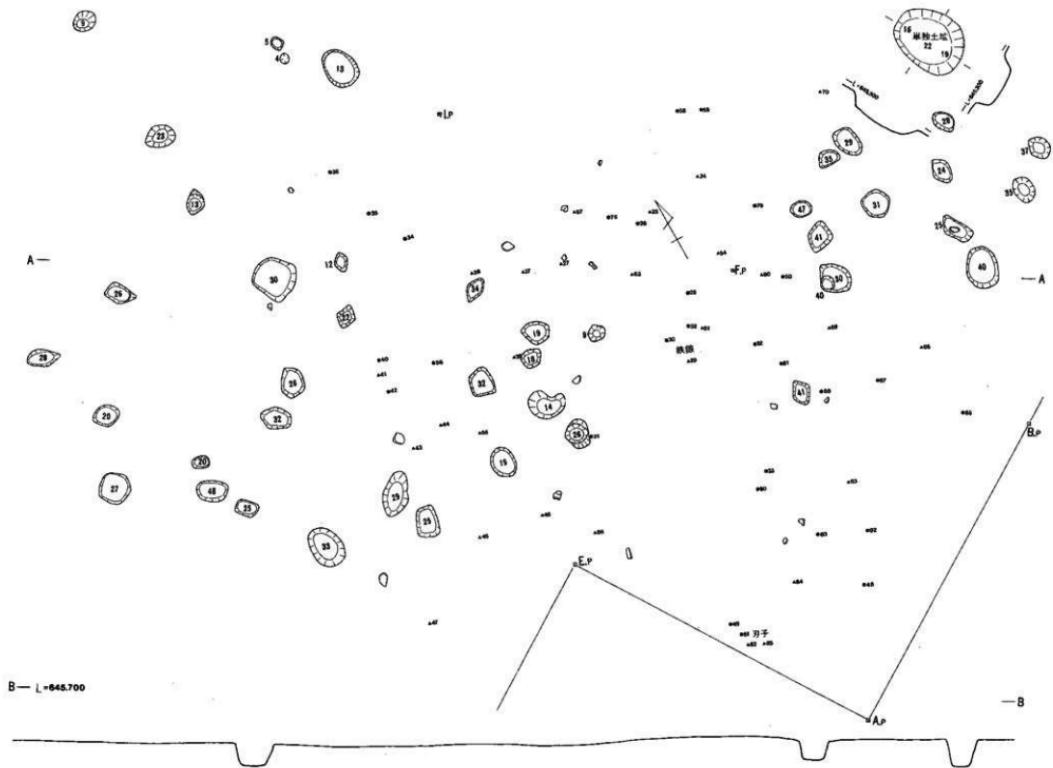
本跡は第1号住居跡の南東方向6mの地点に位置する。土塗と言うよりは壺形土器の出土遺構と考えた方がよい。高さ71.6cm、口径21.6cm、頸径15cm、胴径50.8cm、底径10.8cmを測る。器内の堆積土は第6図のとおりである。調査時点では炭化物は検出されなかった。下位の胴部の破損状態から当初から横倒しの状態であったか、ゆるやかに倒れた可能性が強い。又、上位の胴部片が半転して下位の胴部に密着していくて遺存していた点が注目される。



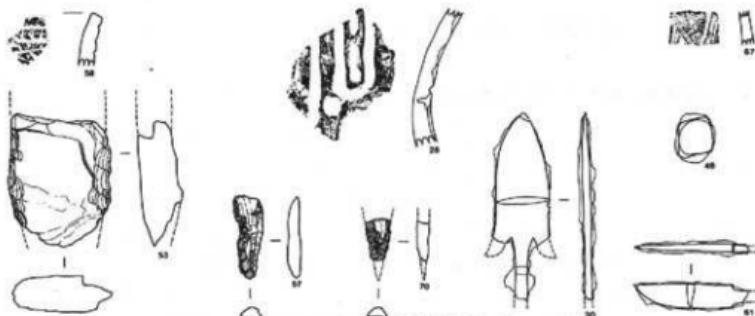
第6図 A地区単独土塗出土壺形土器
出土状態実測図 (S = 1/30)



第7図 同壺形土器実測図 (S = 1/6)



第8図 A地区柱穴群・単独土灶実測図及び遺物分布図 (S=1/60)

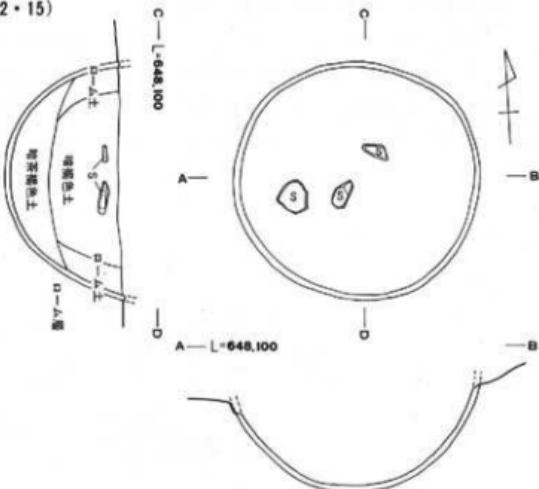


第9図 柱穴跡群周辺出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

柱穴跡群(第8・9図 写真12・15)

第1号柱の南側、暗茶褐色

土層中より発見され、ほとんどが黒色土・黒褐色土で埋まっていた。方形・円形・橢円形が多く、長軸は50cm前後、深さは9~48cmと定まっていない。定間隔のものは少なく、東西2群に分かれる。出土遺物は第9図を参照されたい。



農業用貯蔵施設(第10図、写真23)

A地区北西隅より出土し、直径1.3m、深さ60cm、厚さ4cmを測る。覆土は第10図のとおりで、まだ腐植が不完全な土が埋まり、自然石が投げ込まれていた。農家の人の話によると、最近まで堆肥等の貯蔵に使われていたという。しっくい製で、焼き固めたらしく木炭が遺存。

第10図 A地区農業用貯蔵施設実測図 ($S = 1/30$)

第3節 調査B地区の構造と遺物

B地区については、第3図を参照されたい。同地区西端土手際に、9つのグリットをあけたが表土30cm前後で疊層となり、1.5m位まで掘り下げたが疊がより多く大きなものが出てきた。同地区中央からC地区への東へかけても、表土に疊が露出していた。昭和36年の大災害時、それ以後削土をくり返し、C地区的レベルからゆるやかにB地区西端へかけて傾斜していた台地を取ってしまったと聞き、B地区には遺物包含層がないと判断した。試掘では石鎚と土器1点が出土。

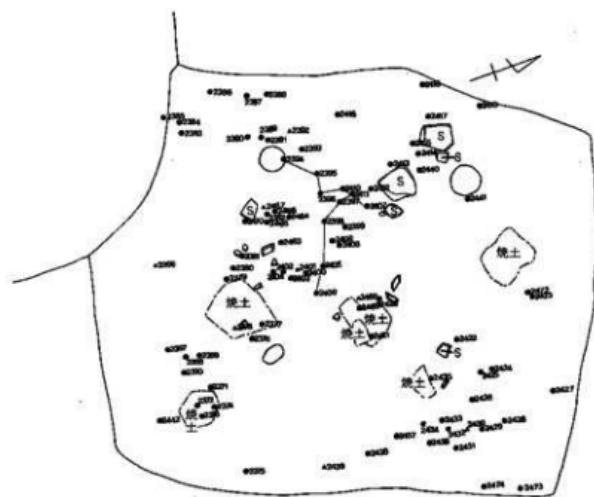
第4節 調査C地区造構と遺物

第1号住居跡（第11～14図、写真33・34）

C地区のはば中心より発見され、東西4.5m、南北5.3mを測り、隅丸長方形を呈する。壁高は、北壁で65cm、西壁で35cmで、北西壁は第2号住により切られている。主柱穴はP₁～3で42cm～49cmを測る。P₄は土塙により吸収されている。炉は埋甕炉である。床は全体的に堅く、炉に向い床面に4つの小穴がある。出土遺物は第13図を参照されたい。特に注目されるのは、No.324外の大型壺形土器で、器高73cm、口径24cm、頸径15.2cm、胴径49cm、座径15cmで、A地区単独土塙出土のものと大きさが極似する。

第2号住居跡（第15～17図、写真33・34）

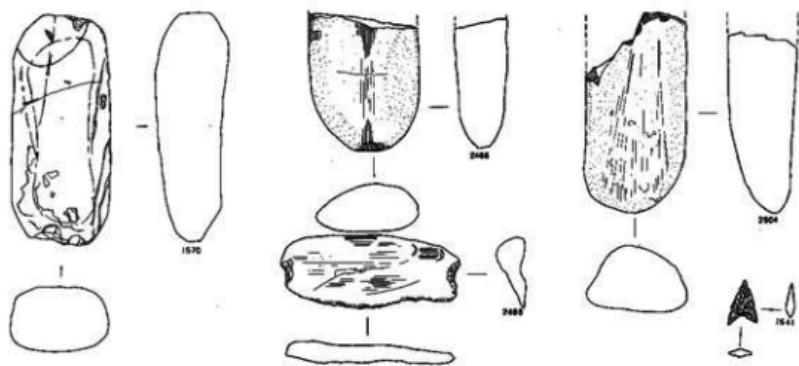
第1号住の西より発見され、さらに同レベルで西に第8号住がある。第8号住との切り合いは不明であるが、境あたりに埋甕炉が南北軸に2つ並んでいる。東西6.7m、南北6.2mを測る。壁高は、北壁で55cmを測る。主柱穴は、R～Lが考えられるが、第8号住との兼合は不明、炉は埋甕炉で北壁寄中央にあり、さらに北壁には浅いピットがある。出土遺物は第17図を参照されたい。



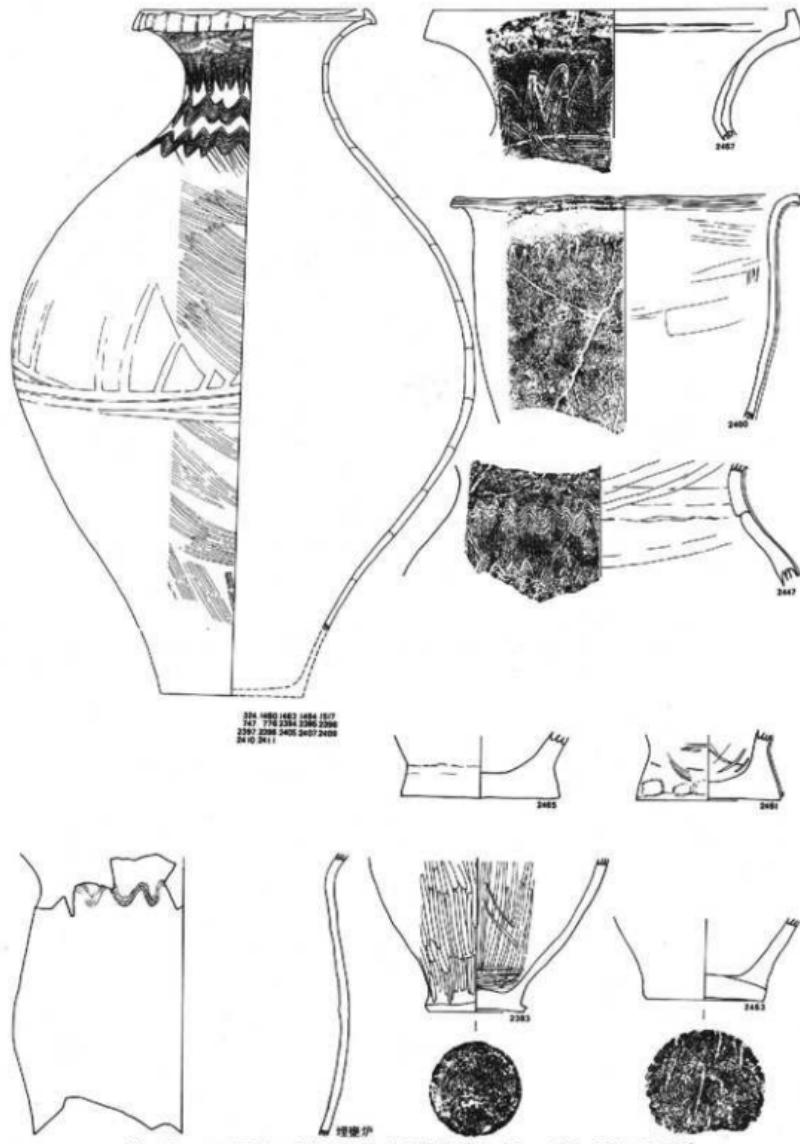
第11図 C地区第1号住居跡出土遺物分布図 (S=1/60)



第12図 C地区第1号住居跡実測図及び出土遺物分布図 (S=1/60)



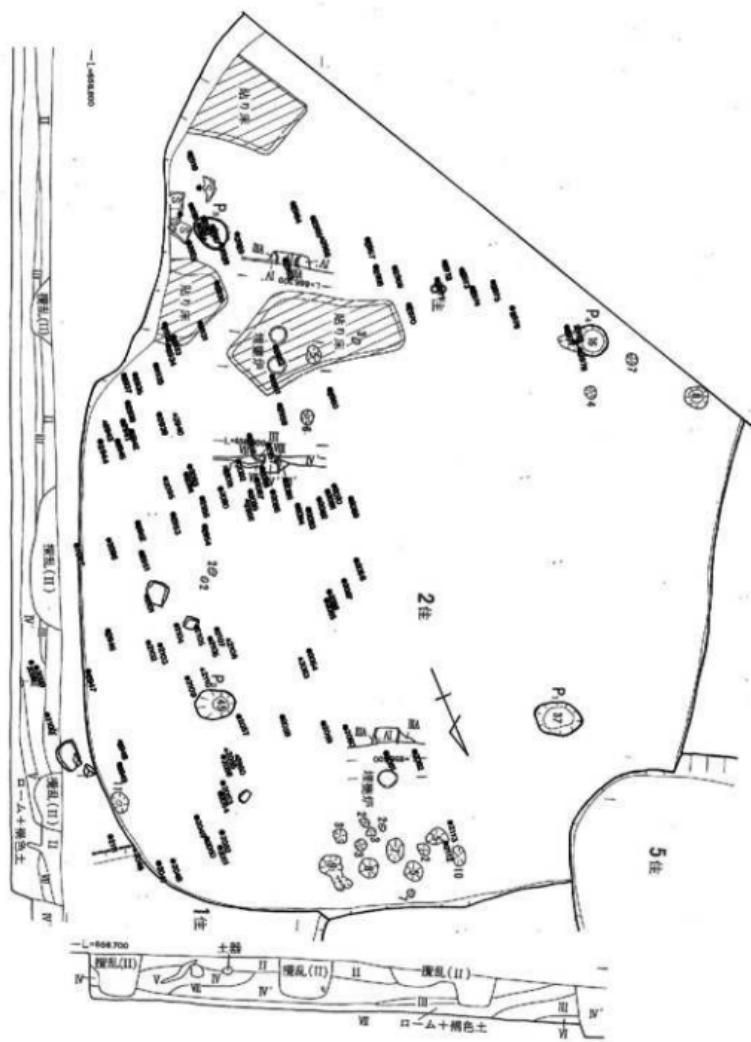
第13図 C地区第1号住居跡出土石器実測図 (S=1/3)



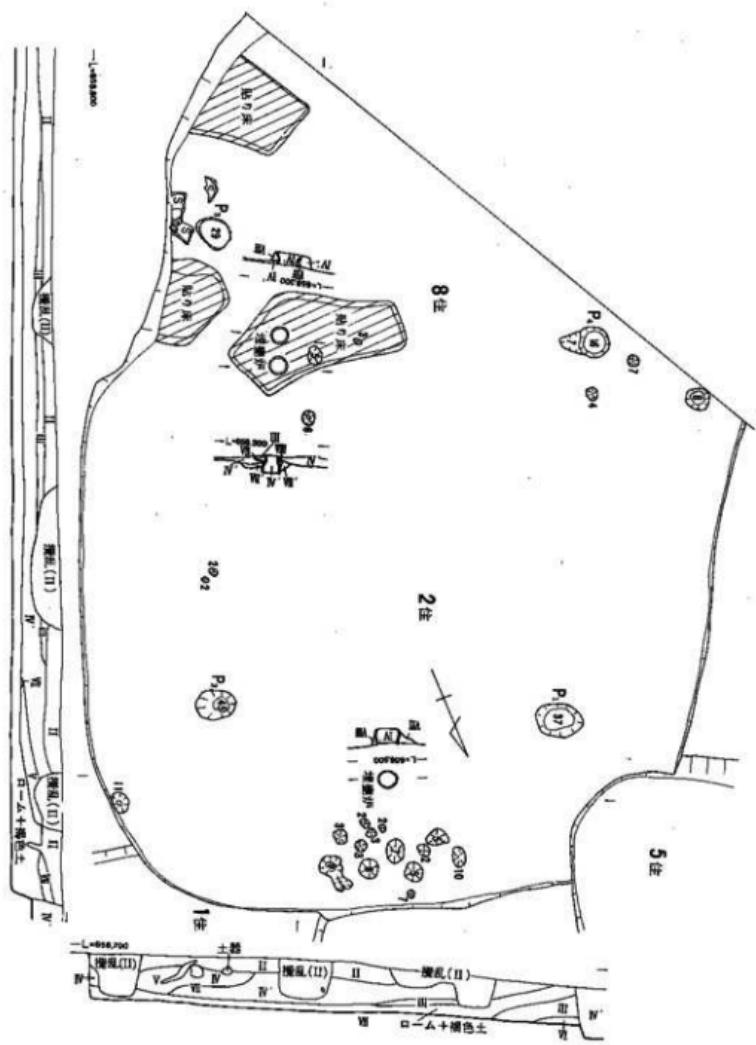
第14図 C地区第1号住居跡出土土器実測図 (S=1/3、324の1/6)



第15図 第2号・8号住居跡出土遺物分布図 ($S=1/60$)



第15図 第2号・8号住居跡出土遺物分布図 (S=1/60)



第16図 第2号・8号住居跡実測図 (S=1/60)



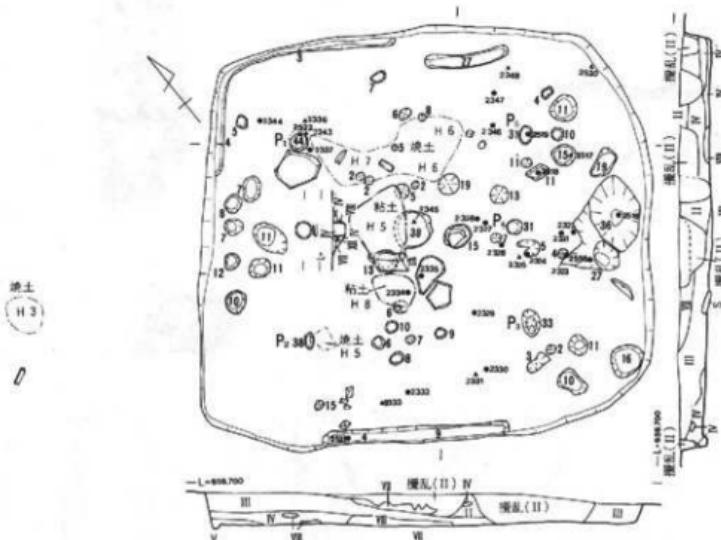
第17図 第2号住居跡出土遺物実測図 ($S=1/3$)

第3号住居跡（第18・19図、写真 33・34・37）

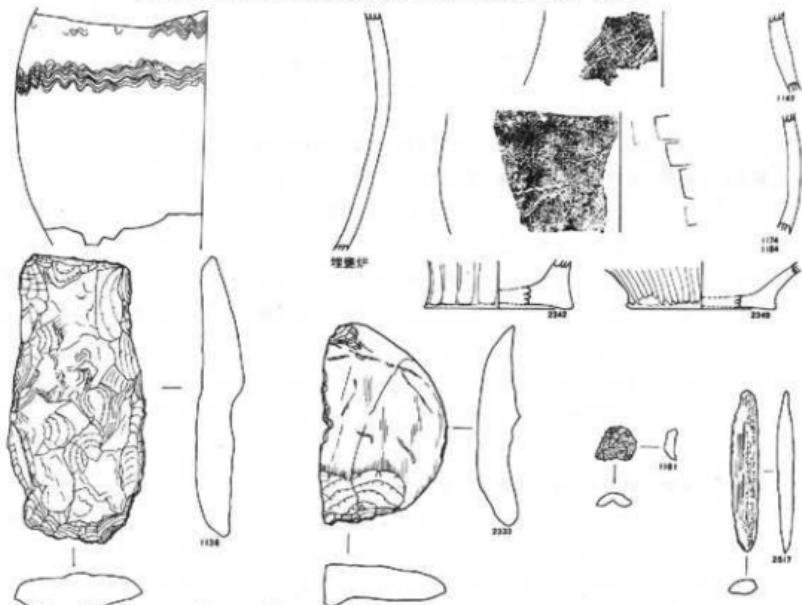
本跡は、C地区の北西隅より発見され、長軸4.75m、短軸4.35mを測り、隅丸方形に近い形を呈す。壁高は、北西壁で35cm、南東壁で25cmを測る。床面は堅致であり、主柱穴はR～Eである。他の住居跡の柱穴形に比らべて小さく、R以外は幅の狭い楕円形又は半楕円形を呈す。床面には全体的に小穴が多くある。炉は埋甕炉で北西壁寄りにあり、手前に棒状の硬砂岩が遺存していた。特に注目されるのは、炉手前の床面に、厚さ5～8cmの粘土（粗い長石・石英を多く含む）が遺存しており、その内1kgを水洗いした結果、粘土質88g、砂・粘土質388g、長石・石英外260gであった。北・東・西壁に周溝がある。出土遺物については、第19図を参照されたい。

第4号住居跡（第20～22図、写真 33・34・39・40）

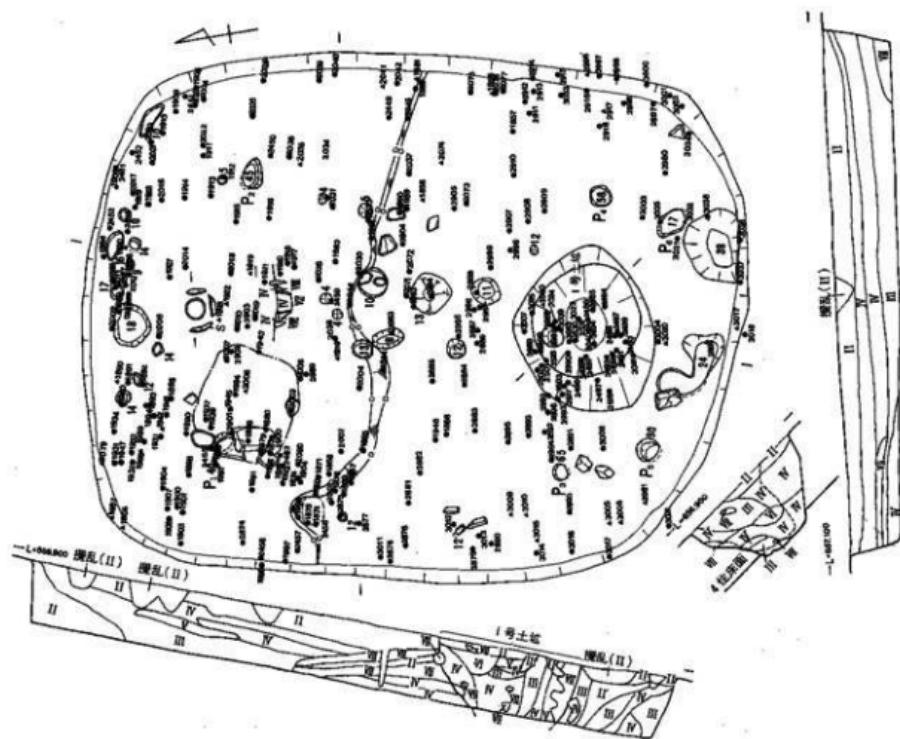
本跡は、第3号住の東より発見され、東西5.6m、南北7mの隅丸長方形を呈す。壁高は、70cm前後で、主柱穴はP₁～4で、床は堅い。炉は埋甕炉で手前三方を自然石砂岩で囲む。断面図でも分かる様に、ローム土が二次堆積しており意識的に埋められている。南壁寄りに土塙1号が住居跡覆土を切り込んでいる。出土遺物は第21・22図を参照されたい。なお、No1873は炭化クルミ。



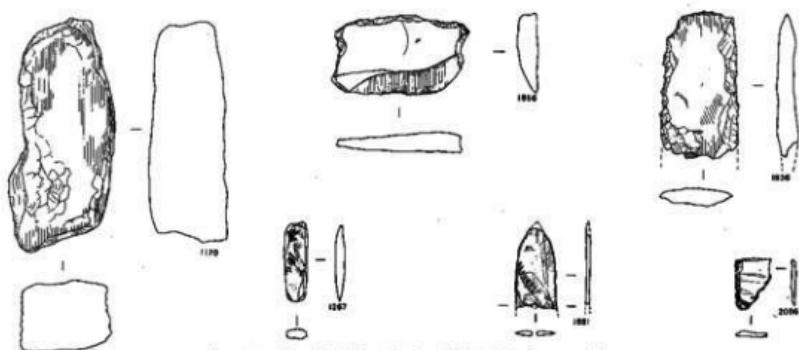
第18図 第3号住居跡実測図及び出土遺物分布図 ($S=1/60$)



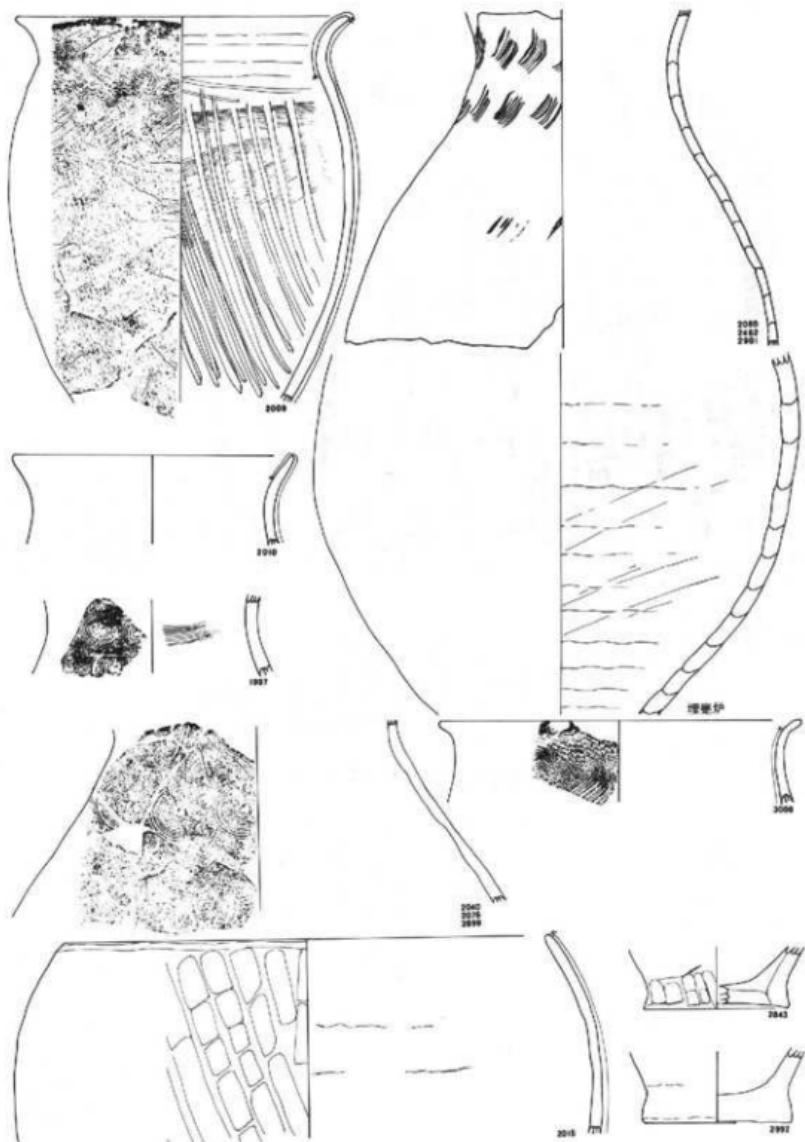
第19図 第3号住居跡出土遺物実測図 ($S=1/3$)



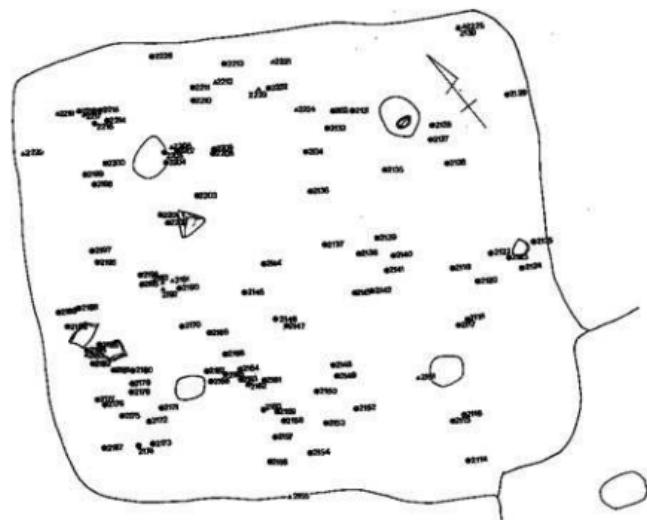
第20図 第4号住居跡・1号土坑実測図 ($S = 1/60$)



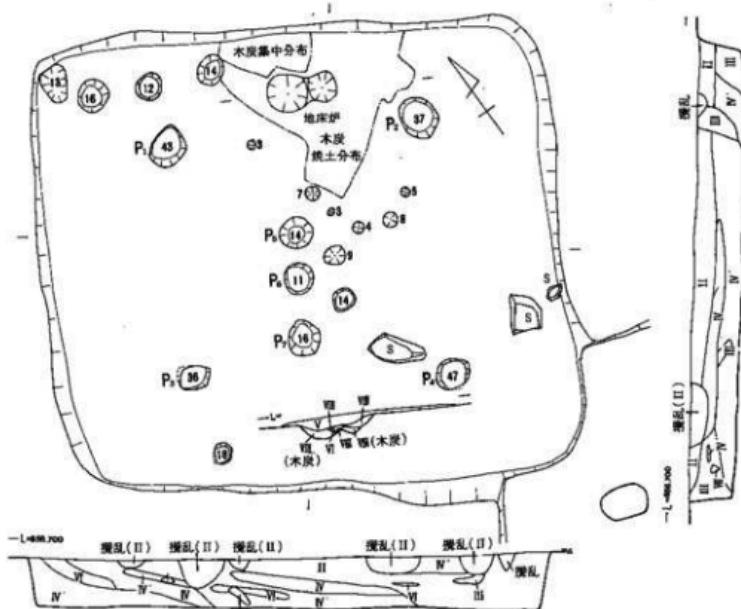
第21図 第4号住居跡出土石器実測図 ($S = 1/3$)



第22図 第4号住居跡出土土器実測図 (S = 1/3)



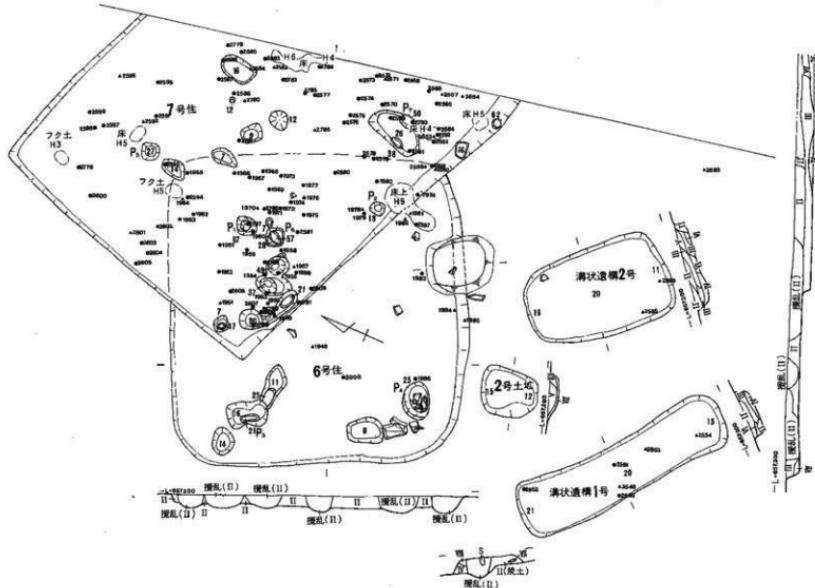
第23図 第5号住居跡出土遺物分布図 (S=1/60)



第24図 第5号住居跡実測図 (S=1/60)



第25図 第5号住居跡出土遺物実測図 (S=1/3)



第26図 第6号・7号住居跡、2号土爐、溝状造構1号・2号実測図及び遺物分布図($S=1/60$)

第5号住居跡(第23~25図、写真33・34)

第2号住の北に、第2号住の北壁を切って位置する。東西5.5m、南北5mを測り隅方五角形を呈す。壁高は南で45cm 東で60cmである。主柱穴はP1~4で、床は堅い。がは地床炉で、炉に向い小穴が3ヶ所ある。床面に盤状の花崗岩が2点遺存していた。出土遺物は第25図を参照されたい。

第6号住居跡(第26・27図、写真35)

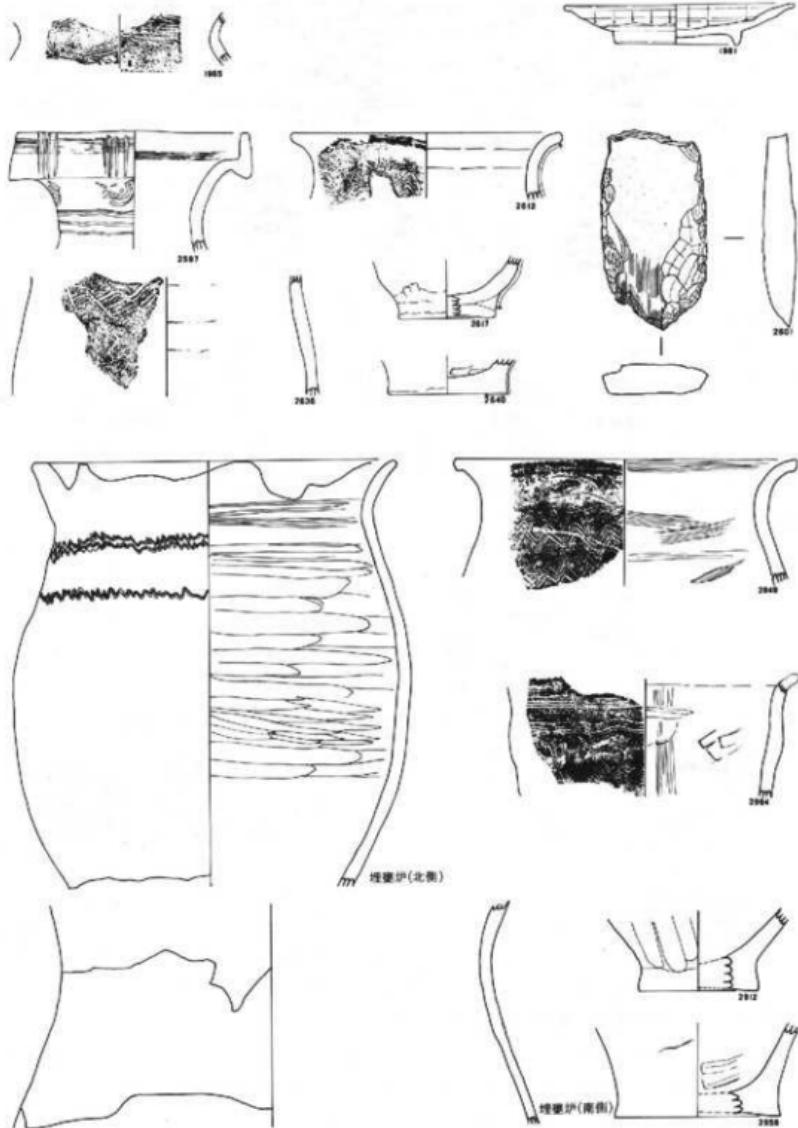
本跡はC地区の東端に位置し、第7号住により切られてる。東西4.6m、南北4.5mのはば方形を呈す。壁高は南で15cm、西で15cmと浅く、床面は柔らかい。主柱穴はP1~4が考えられる。南壁中央に若干焼土を含むマウンドが遺存し、カマド跡とも考えられる。出土遺物は、第27図上段を参照されたい。土器器表頸部と灰陶陶器皿が出土している。C地区において、唯一の平安時代以降の住居跡と考えられる。

第7号住居跡(第26・27図、写真35)

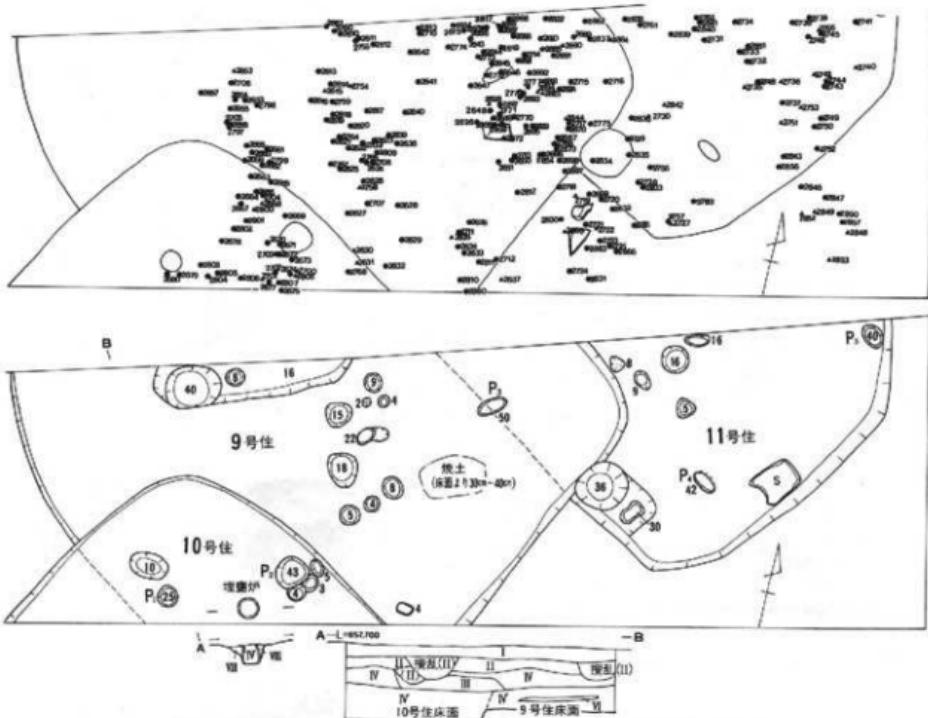
本跡は第6号住を切っている。東端は調査区外の為、判明しないが、南北4.8m、東西6m位の長方形を呈すると思われる。床はやや柔らかく、壁高は北で30cm、西で25cmであり、主柱穴はP5~7の3本があると考えられる。床面及び覆土下層に6ヶ所の焼土が遺存していた。出土遺物は第27図を参照されたい。

第8号住居跡(第15・16・27図、写真33・34)

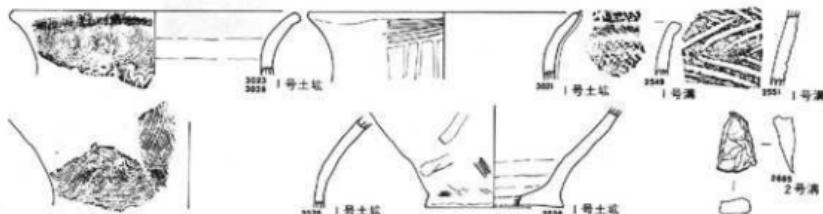
本跡は、第2号住同レベル西端に位置し大きさは不明である。第2号住に吸収されれば、大形住居となるが、地と想われる辺より西に貼り床がある。埋甕炉が2ヶ所南北位に並んで遺存していた。第2号住との切り合い関係は不明であるが、貼り床と埋甕炉の位置から考えると、第2号住の上に造られた可能性が高い。出土遺物は第27図を参照されたい。



第27図 第6号（上段）7号（中段）8号（下段）住居跡出土遺物実測図（S=1/3）



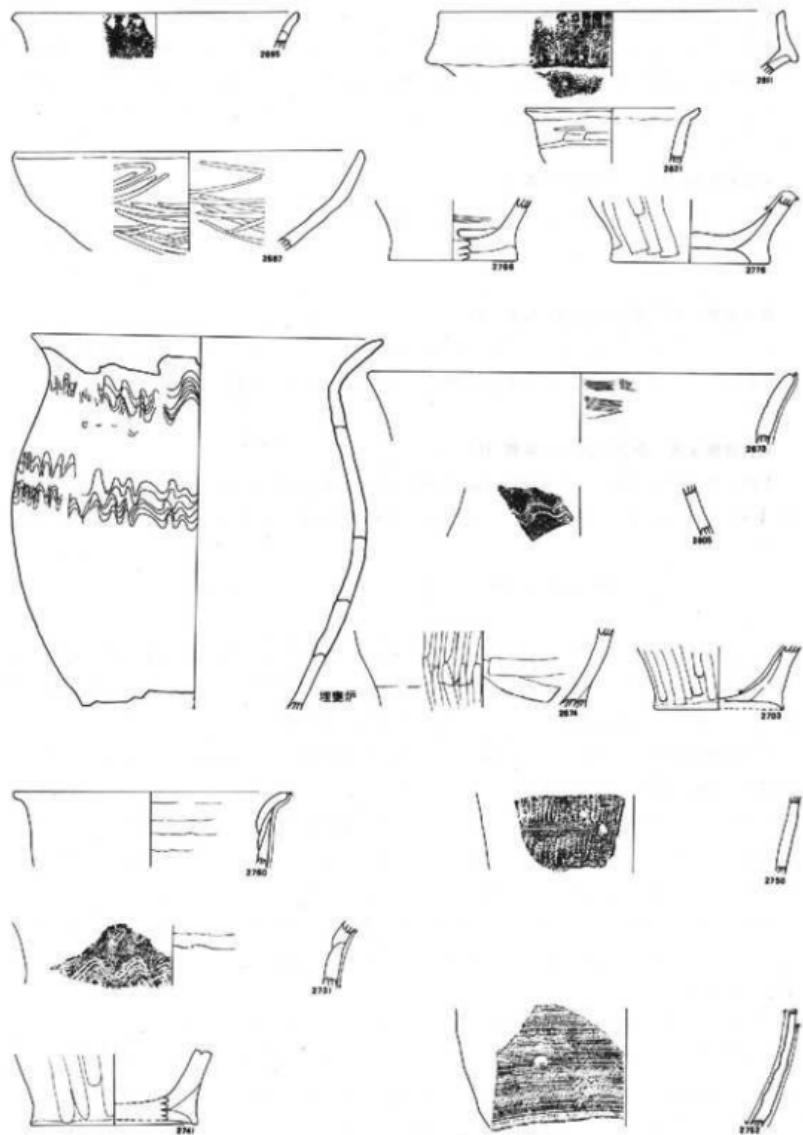
第28図 第9号・10号・11号住居跡実測図及び出土遺物分布図(S=1/60)



第29図 1号土坑、溝状遺構1・2号出土遺物実測図(S=1/3)

第9・10・11号住居跡（第28・30図、写真41）

本3跡は7号住の北側7mの地点より発見され、11号住を9号住が切り、9号住を10号住が切っている。調査区域の中にまだ周辺が含まれていたが、耕作物を除去して調査を進めることができず、中途になってしまった為、全体像はつかめなかった。10号住は埋甕炉をもつ。9・10号住は床が堅かったが、11号住は柔らかであった。壁高は40cm前後であった。出土遺物は第30回参照。



第30図 第9号（上段）10号（中段）11号（下段）住居跡出土遺物実測図（S=1/3）

第1号土塙（第20・29図、写真 38）

本跡は第4号住居を完全に切り床面をも掘り込んでいる。長軸1.7m、短軸1.4mの不整円形を呈し、断面形はすり鉢形を呈する。出土遺物は集中的に遺存する。第4号住が埋没する時に、他の遺構を掘り込んだローム土を廃棄し、その後に土塙として掘り込まれている。深さは80cm。

第2号土塙（第26・29図、写真 36）

本跡は第6号住のすぐ南にあり、長軸85cm、短軸70cm、深さ15cmの精円形を呈し、断面はタライ形である。出土遺物はない。

溝状造構1号（第26・29図、写真 36）

本跡は2号土塙の南西にあり、長軸3.35m、短軸85cmを測り、深さ20cmである。層位は畑のうねで攪乱されている。出土遺物は第29図の2点のみで縄文前期、後期の土器片である。

溝状造構2号（第26・29図、写真 36）

本跡は第6号住の南にあり、長軸2.2m、短軸1.4mの隅丸長方形を呈し、深さは25cm前後である。1号同様に、うねで層位が攪乱されている。出土遺物は使用痕のあるチャートと硬砂岩剝片のみ。

（小原晃一）

第 IV 章 ま と め

今回の調査により検出された遺構は弥生時代後期（中島式併行）の竪穴住居跡10軒、同時代土塙2基、平安時代の竪穴住居跡2軒、時代不確定であるが、弥生時代に伴うピット群1ヶ所、時代不明の土塙1基、溝状造構2ヶ所、現代の「農業用貯蔵施設」1ヶ所である。

出土遺物は総数で（表採除く）3038点で、内訳は土器2552点、石器444点、土師器12点、須恵器10点、陶磁器10点、鉄製品9点、古銭1点である。

土器のうち、弥生時代後期のものが99%を占める。個体数は検討していないが、甕が主であり、壺、鉢、瓶（1）、高环（1）、台付甕（1）、朱塗彩土器（5）、手捏土器（2）の破片が見られる。なお、覆土から、押型文土器片、鶴ヶ島台式系土器片が出土している。

石器のうち、打製石包丁（15）、小型磨製石斧（1）、有孔磨製石錐（1）、打製石錐（7）スクレイバー（10）、石匙（6）、ナイフ型石器（1）が特徴的で、あとは打製石斧、磨り石、敲打器が主を占める。

住居跡については弥生後期が10軒検出できただけであるので集落の変遷等については資料不充分であるが、3軒単位に2ヶ所連続した切り合いをもつ為、単純的にはIII期の変遷が考えられる。岡谷市「櫛原遺跡」の報告で詳細な様に、住居跡中央部の小穴と居住空間の関係、柱穴形がまるで柱が半分に削られたものを使用したかの半梢円形を呈すること、C地区の住居跡群とは離れてA地区の湿地帯周辺に遺存していた大型壺形土器の存在が問題点として注目される。（小原晃一）



写真1 萩林神社東遠望遠景(北西より)



写真2 遺跡近景(調査前)



写真4 A地区調査風景

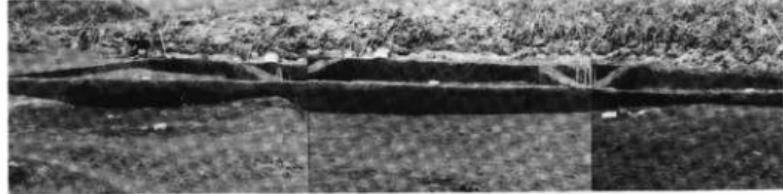


写真3 遺跡近景(調査後)



写真5 A地区第1号住居跡

写真6 A地区土層状態



—写真1—



写真8 第1号住居跡

写真7 A地区遺構全景

写真9 第1号住居跡カマド

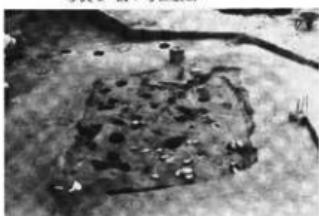


写真10 第1号住居鉄製品出土状態

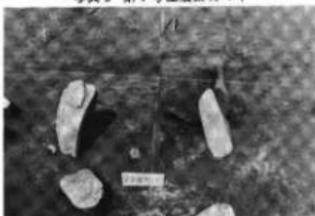


写真11 第1号住居土器出土状態



写真12 柱穴跡群近景



写真13(上)14(下) A地区遺物出土状態



—写真2—



写真15 A地区単体土块及柱穴群
写真16 大型变形土器出土状態



写真19 A地区大型変形土器
写真21 A地区大型变形土器出土状態



写真20 C地区I号生出土大型変形土器
写真22 同左



写真17 同土器内土層状態



写真18 同上



写真23 「農業用貯藏施設」

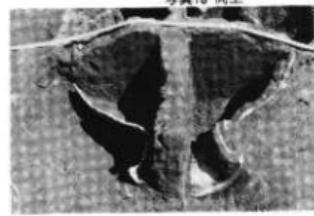


写真24
「一日考古学教室」
開催風景

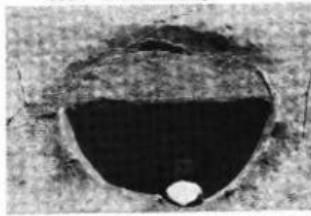


写真25
同 左



写真3

写真26
C地区漁業



写真27 C地区漁業風景

写真28(上)29(下)
遺物出土状態



写真30 C地区土塁状跡



写真31
C地区調查風景



写真32
東伊那小学校
生徒見学風景



——写真4——

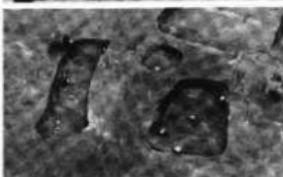
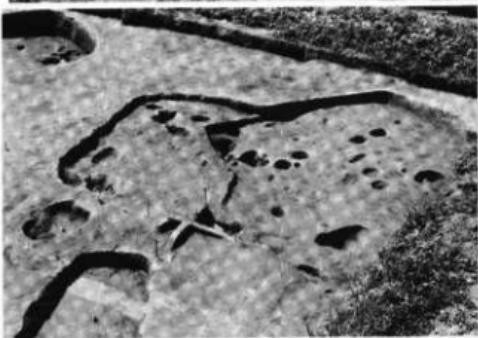
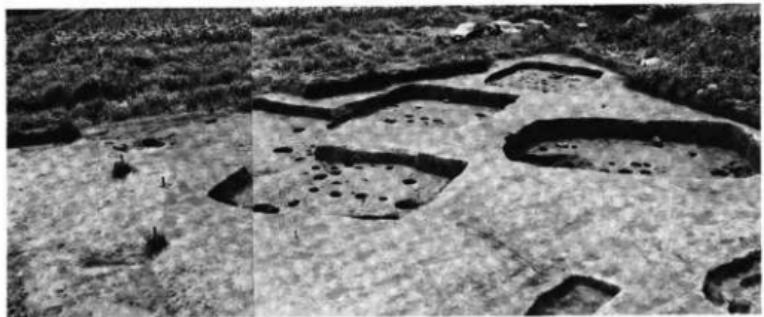


写真34(上)
C地区 1号住 - 5号・8号住
写真35(中)
C地区 6・7号住、2号土塙
写真36(左)
2号土塙、溝状遺構 1・2号

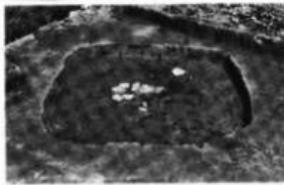


写真37 C地区第3号住粘土出土状態(中央)
写真38 C地区1号土塙土層状態

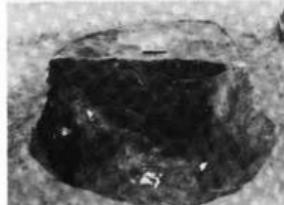


写真39(上)40(下)第4号住ローム二次堆積状態





写真42~49
各住居跡出土埋甕
及U地床炉

写真42

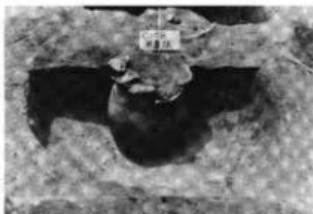


写真47

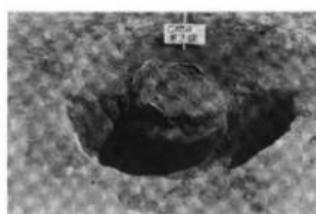


写真43



写真50~52
3~5号住主柱穴

写真44



写真45



写真50



写真46

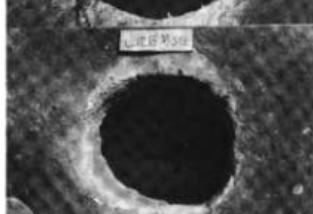


写真52

—写真6—

栗林神社東遺跡

——緊急発掘調査報告——

昭和58年3月20日 印刷

昭和58年3月25日 発行

編集 駒ヶ根市上穂南2-15市立駒ヶ根博物館内

県営ほ場整備事業駒ヶ根東部地区

埋蔵文化財調査会

発行 伊那市青木町伊那合同庁舎内

南信土地改良事務所

駒ヶ根市赤須町20-1

駒ヶ根市教育委員会

印刷 伊那市みすず下川手

鴎小松総合印刷所